山梨県の中世から近世

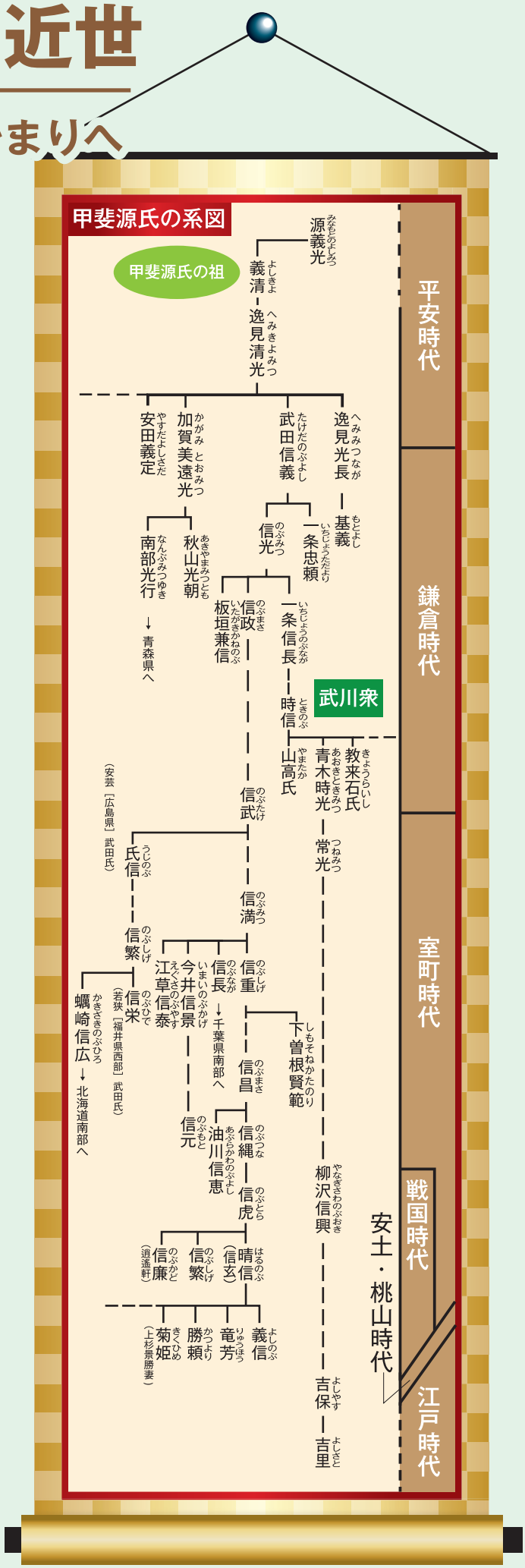
甲斐源氏の始まりから甲府の始まりへ

平安時代後半から鎌倉時代
〔約1100年前から約700年前〕

甲斐源氏は源義光の息子である義清を始まりとして、甲斐国(山梨県)で勢力を張った武士団です。義光は甲斐守に任じられ、義清の代になると、本格的に甲斐市川荘(市川三郷町)に拠点を置きました。逸見清光、加賀美遠光、安田義定など義清の子どもたちは、各地に拠点を展開し、その中の一人、逸見清光は八ヶ岳南麓を中心に活動します。また信義は武田氏を名のり、韮崎の地に拠点を展開し、武田信玄に代表される甲斐武田氏に繋がっていきます。

室町時代から戦国時代
〔約700年前から約450年前〕

室町時代の中頃、信満の代に上杉禅秀の乱に加担して甲斐国の守護であった武田氏が一時期衰退してしまいます。その間に八ヶ岳南麓の逸見氏などが力を持ち、武田氏と対立するようになります。逸見氏との対立は武田信虎が甲斐国を統一するまで続くようになります。甲斐国を統一した信虎は川田 150 (甲府市川田町) にあった拠点を躑躅ヶ崎 125 (甲府市古府中)の地へ移し、信濃国(長野県)の諏訪氏や駿河国(静岡県)の今川氏などの他国の勢力と争うようになりました。息子の晴信(信玄)の代になると信濃国への積極的な侵攻を行うと同時に、領国の内政に力を入れました。信玄の跡を継いだ勝頼は新府城 67 (韮崎市中田町)に拠点を移すなど領国維持に努めますが、織田信長による侵攻を受け、甲斐武田氏は滅ぼされました。

安土・桃山時代から江戸時代
〔約450年前から約150年前〕

武田氏滅亡後、数ヶ月後に織田信長も倒れ、甲斐国には領主がいない状態となります。そこに隣国の徳川氏と北条氏が甲斐国の領土を得ようと互いに争い、天正壬午の乱が起こりました。その結果、徳川氏が甲斐国を支配することになり、家臣の平岩親吉により、甲府城の建設が始まります。その後、豊臣氏の勢力下となり、浅野氏の時代に甲府城が完成します。甲府には徳川氏直系が入りますが、綱重の子綱豊(後の6代将軍家宣)が藩主となった後、交代して、宝永元(1704)年に5代将軍徳川綱吉の側用人であった柳沢吉保と、その子の吉里が甲府藩主になると、城下町の整備や堰の開削などを行い、甲府の発展に貢献しました。その後、幕府の直轄となり、町方は甲府勤番支配へ、在方は代官支配となりました。